

そ れ い ゆ

いなぎの女性情報誌

vol. 15
2003



写真：いなぎICカレッジお披露目楽園祭から
(左から 池田恵子さん、伍代莉那さん、泉陽子さん)

内容

- 女と男のフォーラムいなぎ2003報告
- いなぎの女^{ひと}
- おすすめビデオ など

女と男のフォーラム いなぎ2003報告

この催しは、1975年の国際婦人年をきっかけに男女共同参画社会をめざしてはじまったもので、市民の実行委員会の企画運営で行っています。今回は、3月2日城山文化センターにて「はじめの一步はわたしから ~家庭へ、そして社会へ」をテーマに汐見稔幸さんによる基調講演と交流会、パネル展「ひとことメッセージ」などを行いました。ここでは、基調講演の要旨を報告します。



■講師プロフィール

汐見稔幸(しおみ としゆき)

1947年大阪府生まれ。

現在東京大学大学院教育学研究科教授。
同付属学校臨床総合教育研究センター長。

基調講演要旨

「はじめの一步はわたしから ~家庭へ、そして社会へ」

しおみ としゆき
汐見 稔幸 (東京大学大学院教授)

皆さん、こんにちは。汐見です。今日本の男性は、社会からの圧力が強く、一方で子育てをもっとしろということを言われ、他方では、不景気でいつリストラされるかわからない。そういう状況を念頭に置きながら、男性として、父親として、何に悩み、何を考えて家族を作ってきたのか、体験に基づいた話をして欲しい。こういう依頼を受けています。

ということで、私的な話になって恐縮なんですけど、今日はわが家の家族づくりのような話をさせていただきます。

私の子育て

子どもは3人とも、ほぼ産休明けから保育園にお世話になって、共働き家庭で13年間、保育園の送り迎えをしました。妻は、週に2日か3日は夜、遅くなります。ですからその日は私の番で、保育園に迎えに行って、買い物をして、ご飯を作って食べさせ、風呂に入れて、絵本を読んでやってとやるわけです。

そういうことを13年間続けて、いろいろな思い

をもちました。〈中略〉

それで世の中のお父さんに、育児というのは中途半端にやらないで、まじめにやったらこんなに面白いものはないし、こんなに大事なことはない。私のような人間は、ヨーロッパに行ったら別に珍しくも何ともない。それでいつも歯がゆい思いをしています。

学生時代

お袋は私がこの年になるまで、「勉強しろ」と直接私に言ったことはありませんでした。それが私にとってはとてもありがたかった。私自身は高校のとき、今でいう不登校のような生徒でした。

〈中略〉

後から、なんで私は高校3年間学校に適應できずに悩み抜いていたのか考えてみたんですが、結局、人間の平等についての疑問だったように思います。半分は、それまでの自由な雰囲気なくなったことへの戸惑いだったんですが、半分はもっと大き

な問いへのたじろぎだったように思います。僕の幼いときの友だちは、ほとんど中卒で就職している。家庭の経済力がちょっと違ったり、学校の勉強で成績がちょっと違ったりしたら、なんでこんなに人生違うのだろう。＜中略＞「お前はいい」というような人生を送ることに對して、潔しとすることができなかったのです。＜中略＞

そのころ、私は好きな女の子ができてしまいました(笑)。そのことをその女の子に打ち明けて、しばらく付き合っていたら、手紙が来ました。それが断りの手紙でしたのでショックでした。彼女の手紙には「あなたはいい人かもしれないけれど、女性への差別意識がある」と書いてありました。例えば、「それ、俺やったる」ってあなたはさりげなく言う。なんで「やったる」なのか。女はしてもらわなければならない存在じゃない。そんなことを僕は言った自覚もなかったけれども、そうなのかと思ってすごくショックだったのです。

それで今度は男女の平等とは何かということも私のテーマになってきました。＜中略＞

やはり知らないうちに私たちの社会には様々な差別などがあって、人間の平等とはほど遠い社会ののだということをいろいろと考えざるを得なくなりました。そのときから人間の平等とはどういうことかとか、男女の平等とはどういうことか、考えざるを得ないテーマとしてずっと私に残っています。

次世代へのメッセージ

私はなぜこんなことを話しているかといいますと、子育てをやってきたり、家族を作ってきたりしながら、いつでも自分にとってありがたかったのは、親がこういうふう^にに育ててくれたからだとか、親が必死で生きてきている姿を私に示してくれたからだとか、あるいは高校生のときに悩んだことが私に

とって出発点になったとか、常に後ろを見て、もう1回前を見る、後ろを見て前を見るということができたことだと思っているからです。子育ては、自分の人生を振り返ることによってしかできない、あるいは、自分の人生を再構成することで子育ては意味深くなる。このことを発見したような気がしているのです。そしてこのことは私が次の世代に送りたいと思っている一つのメッセージでもあります。



人間というのは、自分が本当は何を求めてこの世の中に生きているのか、わかっているようでいてわからない。特に男^{より}女の人よりも鎧^{よろい}だとか兜^{かぶと}だとかをいっぱい着せられて、自分が本当に求めていたものが何だったのか、わからなくさせられてしまっています。本当は、どんな人間だって幼い頃からいろいろな体験をして、そこで自分のやりたいことの基礎を作っているはずなのです。そういうことをいつしか抑圧してしまって、人生は頑張^{って}、競争でいい地位を占めることだなんて思い込んでしまうと、本当の自分というものをどんどん見失ってしまう。

人間にとって最もうれしいのは、私は人と同じ感情を共有できたときと思うんですが、競争はそういう体験を阻害してしまいます。人が喜んでい^るのをみて同じ感情を感じると、とてもうれしいでしょう。同じように、人の悲しみを自分の悲しみのように感じられたときに私たちは、その人と深く交わ

っていると感じるんじゃないでしょうか。これを共生の論理というすると、競争の論理は共生の論理と矛盾すると思うんです。

小さい時分から、〇〇ちゃんが悲しんでいたら同じように悲しみなさい、〇〇ちゃんが喜んでいたら同じように喜びなさい、それができることが人間にとって一番尊いことなのだよ、こういうふうに、私たちはだんだん育てなくなってきたのではないのでしょうか。

日本の社会がいじめとか不登校とか引きこもりとか、いろいろなことでだんだん問題を積み重ね始めた根っこにあるのは、人生を小さい時分から競争だというふうに教育されているからだと思っています。今日本は、もう一回みんなが足元を見直さなければ、何を目指していいかわからない社会になってきているのではないかという気がしてならないのです。私自身は、小さいときから目指そうとしていたものは何かということを懸命に探すと、子どもを育てること、家族を作ることを同じテーマとしてやってきたのだと思います。



パートナーとの関係

結婚したとき、妻はフィフティ・フィフティを求めました。ご飯を作るのも半々だとか、掃除をするのも半々だとか。形式的に半々の関係ですね。それに対して僕は、男女が同権で平等であるということ

は大事だと思うけれども、それぞれがお互いに得意なことをし合って、全体として思いやり合えばいいじゃないかと言ったのです。何でもフィフティ・フィフティとは限らないだろうということでさっそくケンカになったのを覚えています。

そういうところから結論的にはお互いだんだん楽なほうにいつている。無理しないほうに行っている気がします。そこで学んだのは、やはり夫婦というのは本音でワーワーやるのがすごく大事だということです。＜中略＞結局長く議論し、実践してきた結果、僕が手に入れた結論は、夫婦というのは、自分がやりたくないことは、相手もたぶんやりたくないのだ。自分がしたいことは、相手もやりたいと思っているのかもしれないということです。

20年をひとつの区切りに

それぞれの家庭に、それぞれの型があっていると思いますが、これからの時代を考えると、男の人が自分の生き方をもう少し人生の途中で考え直したり、リストラされて考えざるを得なかったというのではなくて、はじめからそういう構えで家族を作ってみたほうが良いような気がします。私は、人生20年を4回生きると考えたらどうかとしてみました。最初の20年は、どうやって自分が生きていくかの準備をするわけです。だから勉強もするし、さまざまな能力を蓄えます。

そして次の20年は、社会に初めて出るわけです。場合によっては結婚もする、子どもももうける。社会に出たら仕事の責任が生じます。結婚したら家族に対する責任、子どもに対する責任が生じます。だからそこは精一杯頑張る。精一杯頑張るけれども、その選んだ仕事とかが本当にそれでよかったかどうかというのは、最初の20年の蓄積で選んでいるわけですから、わからないわけです。しかも時代の

変化が早いと、20歳代で選んだ生き方が、20年後にはあまり社会に合わないということも起こりえる。だから第二の20年の間は、そうやって懸命に仕事をし、家事・育児とか家庭作りに参加しながら、俺が一番求めていたものだろうかということも並行して考えていくような生活をしたほうがいいと思っています。懸命に生きながら自分を少しずつ相対化するのです。

でもそれは1人でやらないほうがいい。非常に難しいことですが、例えばお父さんが育児をしながら、親父の会のようなところでできるだけ出入りして、自分と違う仕事をしている人間と知り合いになる。俺はこっちがやりたかったことかもしれない。そういうものを2番目の20年のときに、さまざまな刺激を受けて蓄えるべきだと思います。

その上で、「やっぱり俺は最初の選択でいい」と、そのまま続けてやっていく人はそれでいいし、「やっぱり俺はこっちのほうをやりたかった」というこ

とになれば、第三ステージの20年、例えば40歳代とか50歳ぐらいになったときに、思い切って変えてみたらどうか。それでまた20年やってみる。

最後の20年は、子どもにも誰にも迷惑かけないで、どうやって死んでいけるかを考える20年(笑)、あるいは社会に恩返しする20年だと思います。そういうことを考えて、ダラダラとこないで「えいっ!」と決断できる能力というのが、いい家族関係を作っていく上では、とても大きいと思いました。これは男性にも女性にも言えることです。

男性に贈るメッセージはひとつ、いつも自分が本当に求めてきたのはこれなのかということを考えながら、つまり自分の若いころからのことを振り返りながら人生を送るべきだということです。もうひとつは「えいっ!」と自分を脱皮させるために、ざっくばらんに自分の本音を語り合えるような、仕事を離れた仲間を必ず手に入れるべきだということです。これだけはどなたにもやってほしい。

文責:企画部協働推進課女性青少年係

いなぎ女性の悩み相談

解決への一歩は、少しの勇気。まずお電話ください。

悩んでいませんか?あなたの生き方 パートナーからの暴力 仕事の悩み
人間関係(家族の問題も含め) 性暴力 子育てなど

専門の女性相談員が、秘密を守り、親身に相談をお受けします。

相談無料 仮名可 電話相談可 外国人女性(外国語)の方も対応します。

相談日時:毎月第1・3水曜日(前日に電話で予約してください)

予約・問合わせ:稲城市企画部協働推進課

☎042-378-2111(内543)



女性に対する暴力根絶に向けた
シンボルマーク

いなぎの女^{ひと}

今回は、〈中高生の居場所づくり〉をすすめる自主グループ『いなぎFF(フレンドリー&ファミリー)ネットワーク』(以下いなぎFFネットワーク)の代表をされている廣田雅恵さんと運営メンバーのみなさんにお話を伺いました。



上段左から浅井さん、小山さん、岡田さん、
下段左から廣田さん、林さん

どのような活動をされているのですか？

廣田さん：活動内容としては、3つです。ひとつは、『青少年コーナー』の設置、もうひとつは、教育ボランティアです。3つ目は、子どもたちの自主的な活動の支援をしています。

『青少年コーナー』というのは、毎週水曜日の午後5時から8時、城山文化センターの喫茶コーナー「陽だまり」のスペースを子どもたちが使える場所として開放しています。

教育ボランティアは、第五中学校で月曜日に各学期、数回程度、基礎学習のドリルを使って学習支援をしています。

また、自主活動の支援とは、青少年コーナーに参

加している子どもたちの中で、今ボイストレーニングのグループが活動しています。そのグループの立上げの手助けや練習場所の確保などをしてきました。

グループのメンバーは

廣田さん：運営メンバーは5人で、会の目的に賛同し、活動に協力してくださる人は15人です。ほとんどが、向陽台地区のみなさんで、赤ちゃんから大学生になるお子さんをお持ちの人や、子育てを終えた人までと、幅広い世代の人が関わっています。

このグループをつくろうとしたきっかけはなんですか？

3年前、中学校に深く関わり、子どもたちと接した時に、地域に子どもたちの居場所が無いことに気がついたのがはじまりですね。同じ思いを抱いていた母親同士が会を立ち上げました。中高生の子どもたちが『ホッとくつろげるような居場所』作りを目指して2001年の9月から活動しています。

活動をしていて、うれしかったことやよかったと思うことは何ですか？

子どもたちが繰り返しきてくれているので、自分たちの居場所なんだという思いが定着してきていることでしょうか。親、先生、また友だちとの関係で上手くいっていない子どもたちが来て、話をしていくこともあります。そういう時はこちらもホッと、子どもたちとのつながりを感じます。

逆に大変だったり、苦労していることなどありますか？

月に1回、定例会を開き、企画、運営について運営メンバーで話し合いを重ねています。子どもた

ちへの対応の仕方や会のあり方などについては運営メンバーの意思確認がとても大事ですので、話をまとめていくのに苦労する時があります。

また、(活動の場が)文化センターという公共施設なので、行政との歩調合せも大変ですね。

今は、週1回水曜日しか開放できていないのですが、本来は毎日使える場所が必要だと思っています。そのためには協力メンバーがもっと増えていって欲しいです。

大人がいれば子どもたちが(文化センターを)使えるので、ぜひ興味のある方は見に来てください。

中学生や高校生と関わってみて、感じることはありませんか

前向きな姿勢で行動することが少ない気がしますね。外で体を動かして遊んでできていないなと感じることも多いですね。

仲間意識が強すぎるようなところがありますが、この年代はある程度仕方ないのでしょうか…。



青少年コーナーの様子

最後に中高生や中高生をお持ちの保護者の方にメッセージを

中高生のみなさんには、「めんどくさい」とか「つままない」という言葉に容易に逃げないで、一歩踏み出してみずやってみて欲しいですね。

保護者の方には、ぜひお願いしたいことがあります。少し厳しくなってしまうて申し訳ないのですが…

思春期の子どもたちとうまく向き合うには、親も自分だけの狭い価値観にとらわれすぎていては難しいと思います。自分の子ども以外の子どもたちにも目を向けていくことで、親が多様な価値観を受入れていける気がするのです。大変ですけど、学校の役員やボランティアには積極的に参加して欲しいと思います。それによって普段の学校の様子が見えてくるし、子どもたちや先生とも話す機会が増えれば、理解もしやすくなりませんか。

青少年コーナーでは、お茶を飲みながらおしゃべりをしていたり、英語を教えてもらったりしている中学生たちの楽しそうな姿をみることができました。そして、とても活気あふれるメンバーのみなさんでした。ありがとうございました。

いなぎFFネットワークの 主な活動内容

- ① “青少年コーナー”の設置
- ② 稲城第五中学校の教育ボランティア
- ③ 子どもたちが自主的に活動するための支援

その他に母の日プレゼント作り講座(5月)、英検2次試験対策面接講座、FFサロン(大人がホッとできる場所)などの活動もしています。

お問い合わせ

いなぎFFネットワーク代表
廣田雅恵 ☎379-4850

おすすめビデオ

男女共同参画への関心と理解を深めるための学習用ビデオです。グループや個人への貸し出しをしています。ご希望の方は、企画部協働推進課まで

「ACTION! 東京の男女平等参画を進めよう」

企画：東京ウィメンズプラザ 2003年制作 29分

内容

- 雇用の分野で男女平等参画をすすめよう
- 子育てに対する支援を
- 家庭内等における暴力(DV)の防止を
- 明日に向かって男女平等参画をすすめよう



「地域こそって子育てを！」

企画：内閣府男女共同参画局 2003年制作 28分

内容

- 薬丸裕英が聞く、
樋口恵子先生の育児支援ガイド



それいゆ Vol.15

平成15年10月15日 発行

編集発行／稲城市企画部協働推進課女性青少年係

稲城市東長沼2111

TEL 042-378-2111

誌名の『それいゆ』は、雑誌「青鞥」の創刊の辞として有名な「元祖、女性は太陽であった」の太陽の意味です。やさしい響きのフランス語をひらがなに置き換えました。市民からの公募で命名された愛称です。